

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 9 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531241

研究課題名(和文) 障害のある子どものきょうだいとその家族のQOL支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the QOL (quality of life) support program for siblings of children with disabilities and their families

研究代表者

阿部 美穂子 (Abe, Mihoko)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70515907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、障害のある子ども(同胞)のきょうだいの抱える課題を家族関係の視点から明らかにし、その解決に向け、きょうだい・同胞・親が参加するきょうだい支援プログラム「ジョイジョイクラブ」を開発した。実践の結果、きょうだいの自己理解と同胞理解の促進、きょうだいが同胞に関連して抱く否定的感情の低減、親子関係の安定化と親子間の受容的コミュニケーション促進効果が得られた。研究の結果、障害のある子どもを育てる家族全体のQOLを高める視点から、家族参加型の新しいきょうだい支援プログラムモデルを示すに至った。さらに本プログラムは、大学と障害児親の会とのタイアップにより地域で事業化されることとなった。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed problems in family relationships for siblings of children with disabilities. Moreover, it developed a sibling support program "Joy Joy Club," where siblings, children with disabilities, and their parents participated to find solutions to their problems. Thus, siblings could deepen their understanding not only of their disabled brothers and sisters but also of themselves. In addition, the levels of negative feelings that siblings held regarding their disabled brothers and sisters were reduced. Furthermore, sibling-parent relationships became more stable as communication between parents and siblings became more receptive. This study provided a family participation-type sibling support program model to improve the QOL of the whole family when there is a child with disabilities in the household. Furthermore, the university and organization of parents of children with disabilities have come together to implement this sibling support program in the greater community.

研究分野：特別支援教育

キーワード：きょうだい支援 障害児の家族支援 quality of life 子育て支援 ムーブメント教育

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) きょうだいの成長上の問題

障害のある子ども(以下、「同胞」とともに暮らす兄弟姉妹(以下、「きょうだい」)について、親の関心が向かず孤独感を感じたり、同胞の世話に葛藤を感じたりすることや、家庭外活動時間が減少し活動経験が不足することなどから、心理社会的発達に影響を受けると、指摘されている(Meyer&Vadasy, 2008)。このような問題は、これまでは、主としてきょうだい自身の課題として検討されてきた。

しかし、親の負担感がきょうだいの負担感に影響を与えている(芝崎・羽山・山上, 2006)、きょうだいの成長過程上の問題には、母親へのアピールサインが含まれる(立山・立山・宮前, 2003)など、親子関係の影響が指摘されている。さらに吉川(2002)が、きょうだいたちは、「自分の全てを受け入れてもらったという主観的経験が不足して育つことが多い」と述べるなど、きょうだいの成長上の課題には、家族関係が影響していると考えられる。

### (2) きょうだい支援の現状と課題

しかるに、これまでのきょうだい支援には、家族の関係そのものを支援するという考えが含まれていない。いずれも、きょうだいのみを対象とした心理社会的適応支援が主流である。その代表例として、米国における Sibshop、英国における Sibs.UK が挙げられる。特に Sibshop は、レクリエーションにより、きょうだいの仲間意識を育て、悩みやストレス、不安などを軽減、解決するものであり、国内でも導入例がある。しかし、柳澤(2007)はレクリエーション中心の支援のみでは、問題の解決効果が期待できにくいとして、きょうだいの障害理解を促す系統的な教育的支援の必要性を指摘している。

さらなる問題として、これまでの支援実績の多くは発達障害児のきょうだいを対象としたものである。同胞の障害種別により支援ニーズに違いがあると考えられるが、その検討は不十分である。特に重度・重複障害児のきょうだい研究は十分とはいえず、きょうだい養育上の問題が挙げられているものの(小宮山・宮谷・小出・入江・鈴木・松本, 2008)、支援方法の検討までは至っていない。

### (3) 本研究の独創性と意義

以上より、特に発達期にあるきょうだいの成長にかかる問題解決には、家族との関係性そのものに介入する支援プログラムを開発する必要があると考えられた。また、きょうだいの問題は、家族関係を創り出している家族の在り方が関与していると考えられることから、これまでのようにきょうだいのみを対象とするのではなく、親や同胞をも対象に含めた包括的な支援プログラムを新たに開発する必要がある。すなわち、本人はもちろん、家族全体の Quality Of Life(以下、QOL)の視点から支援がなされる必要がある。しかし、この

ような考え方に基づく支援プログラムは、きょうだい支援先進国といわれる欧米でも見られず、独自の視点によるものである。加えて、障害理解促進や同胞の障害種別ニーズの違いを踏まえた支援についても、検討する必要があると考えられた。

## 2. 研究の目的

以上のことから、本研究は、きょうだいの抱える課題を家族関係の視点から明らかにし、その解決に向けた支援方法を開発することを目的とし、以下の2点から取り組んだ。

① きょうだいとその家族の支援ニーズを明らかにする。

② ①に基づく家族参加型のきょうだい支援プログラムを開発し、その効果を実践的に検討する。

以上により、きょうだいとその家族をエンパワメントする方法を、地域に具体的に発信し、障害のある子どもをもつ家族の QOL 向上を目指す支援体制の充実に資する。

## 3. 研究の方法

### (1) きょうだいと家族の支援ニーズの把握

- ・小学生～成人きょうだいへのインタビュー、親への質問紙調査を通して、直面する問題と親のきょうだいの養育上の問題を検討した。
- ・重度・重複障害のある同胞をもつきょうだいが執筆し、公表されている作文を文献資料として取り上げ、同胞観について検討した。
- ・上記及びこれまでの筆者の研究成果から、きょうだいと家族の支援課題を分析し、本研究で開発する家族参加型のきょうだい支援プログラムに取り入れるべき内容を検討した。

### (2) 家族参加型きょうだい支援プログラム開発の基盤となる情報収集

- ・本研究で開発する支援プログラムに必要な内容について示唆を得るため、Sibshop 及び、Sibs.UK のモデルプログラムの視察により、その効果、及び課題について明らかにした。
- ・障害のある子どもとその家族を対象にした集団ムーブメント活動の参加家族にアンケート調査を実施し、ともに参加したきょうだいの育ちにもたらされた効果と、参加に伴う課題について調査した。これにより、家族参加型のきょうだい支援プログラムにおける、家族成員の相互理解と受容的な関係性を促進するための方法として、ムーブメント活動活用の可能性を実践的に検討した。

### (3) きょうだい支援プログラムの開発と実践による効果検討

- ・知的障害及び発達障害のある同胞をもつきょうだいを対象に、ポートフォリオ絵本作成支援プログラムを開発し、実践により効果を検討した。これは、講義ときょうだい同士の協議により、きょうだいが同胞の障害について知りたいことや解決したい課題に関して、自分なりの答えと対応方法を得て、ポートフ

オリオ形式で絵本にまとめていくものである。さらに、作成した絵本を親と交換日記のようにやり取りすることで、親がきょうだいの考えや気持ちを知り、それに応答する機会を生み出すものである。実践後のきょうだいと親双方の変容から、きょうだいの同胞理解、自己理解、親とのコミュニケーション関係にもたらされた効果を検討した。

・知的障害及び発達障害のある同胞をもつきょうだいと同胞・親を対象に、支援プログラム「ジョイジョイクラブⅠ」を開発し、実践により効果を検討した。このプログラムは、家族全体で取り組むムーブメント活動、次に、きょうだい、同胞、親それぞれのグループ別活動、そして、最後に、きょうだいと親だけが取り組む短時間の親子ふれあいムーブメント活動からなる。実践によりもたらされた、きょうだいが同胞に関連して抱く感情、親子の関係性を評価する質問紙調査における数量的変容、及びインタビューや各セッションにおける観察記録による質的変容を明らかにした。

・重度・重複障害のある子どものきょうだいと同胞・親を対象に「ジョイジョイクラブⅡ」を開発し、実践により、その効果を検討した。プログラムは上記「ジョイジョイクラブⅠ」に重度・重複障害のある同胞をもつきょうだい独自のニーズを考慮した内容を取り入れ、ポートフォリオ絵本制作を加えた構成とした。

#### 4. 研究成果

##### (1) きょうだいとその家族の支援ニーズ

1) インタビュー及び質問紙調査から得られた知見

A 県の小学生きょうだいと親 7 組、B 県の小学生～成人きょうだい 6 名にインタビュー調査、B 県の保護者 36 名に質問紙調査を実施した。その結果、きょうだいと親が抱える課題として、①きょうだいの心理的問題、②同胞との関係の問題、③将来への不安、④地域や友人との関係の問題、⑤きょうだいと親との関係上の問題の 5 カテゴリーが見出された。

2) 重度・重複障害のある同胞をもつきょうだいの作文分析から得られた知見

独立行政法人福祉医療機構の助成により、社会福祉法人全国重症心身障害児（者）を守る会が編纂・発行した、平成 18～19 年度重症心身障害児（者）兄弟姉妹支援等事業報告書に記載されている作文のうち、13～18 歳までのきょうだいが書いたもの全 77 件を分析対象とした。分析の結果、重度・重複障害のある同胞をもつ、中高生きょうだいに特徴的な同胞観として、「家族からの疎遠感」「同胞の命の存続に対する危機感」「障害のある人がもつ役割への着目」「同胞への深い同情」の 4 つが示された。分析結果から、支援プログラム開発にあたり、きょうだいが同胞に対して抱く思いや、障害理解の個別性に配慮し、ライフステージに応じた内容が必要と考えられた。また、知的障害や発達障害とは異なる、重度・重複障害の特性が、きょうだいの障害理解、

及びきょうだいと親、同胞との関係に及ぼす影響を考慮する必要があると考えられた。

3) 本研究で開発する家族参加型のきょうだい支援プログラムに含むべき内容

支援課題に関する研究結果を踏まえ、支援プログラムには、以下の内容を含む必要があると考えられた。第 1 は、親のきょうだい養育上の悩み解決につながる内容、第 2 は、親によるきょうだい理解を促進するための内容、第 3 は、親子のコミュニケーションを促進し、受容的關係性を高めるための内容、第 4 は、きょうだいの同胞観（同胞理解）の個別性と可変性を踏まえつつ、現時点で直面している課題とニーズに即応できる内容である。

(2) 家族参加型きょうだい支援プログラム開発のための基盤となる情報収集

1) Sibshop, Sibs. UK の調査から得られた知見

調査の結果、きょうだい支援は障害のある子どもを抱える家族支援の不可欠要素として公的施策に位置付けられていた。全国の支援機関をつなぐ組織が形成され、技術的な連携とプログラムの共有がなされていた。また、訓練された専門家であるファシリテーターがプログラムを構成し、支援にあたっていた。

特に、Sibs. UK のモデルプログラムは、「Fun」「Relieve isolation」「Acknowledge feelings」「Model coping strategies」「Enhance knowledge」の 5 つの目的をもつ。また、評価を前提とし、きょうだい支援体制そのものが Plan-Do-Check-Action サイクルを含んでいる。これにより、有効なプログラム開発につながっていると考えられた。

2) 家族参加型きょうだい支援プログラムにおけるムーブメント活動活用の可能性

障害のある子どもと家族のためのムーブメント活動に参加した親ときょうだいの 2 年間分延べ 130 組のアンケート結果を分析した。その結果、家族参加型のきょうだい支援プログラムにムーブメント活動を活用する意義について、きょうだいと家族の快感情の共有体験促進、家族間の言語によるコミュニケーション及び感情を共有するコミュニケーションの拡大、きょうだいに対する親の新しい視点獲得の 3 点の可能性が示された。

(3) きょうだい支援プログラムの開発と実践による効果検討

1) ポートフォリオ絵本制作プログラム

知的障害及び発達障害のある同胞をもつ 7 名のきょうだいを対象とし、全 6 セッションからなるプログラムを開発し、1 セッションあたり 2 時間、2 週に 1 回の頻度で実施した。内容は、①打ち解けゲームと第 2 回目以降前回の振り返り（30 分程度）、②勉強タイム（30 分程度）、③ポートフォリオ絵本制作（60 分程度）の 3 部から構成した。打ち解けゲームは、風船やボールを用いて、人間関係作りのためのムーブメント活動を中心に実施した。続く

勉強タイム及びポートフォリオ絵本制作では、①家族理解、②障害の概念的理解、③同胞の行動特性と対応方法の理解、④周囲への対応、⑤自己理解、⑥同胞の療育・学習に関する理解、⑦支援機関・組織に関する情報の7つの観点でテーマを設定した。

実践の結果、対象児らの同胞の障害特性の理解が促進され、対象児らは同胞に対してだけでなく、同胞に関連して友達など周囲の人々との間に起こる問題にも、自分なりの方法でうまく対応するようになった。併せて、同胞に関連して抱く否定的な感情に低減が見られ、特に、「将来の問題」や「過剰な責任感」の下位尺度得点が有意に減少したことが示された。親との関係においても、母親に対するサポート期待感が増加し、親子のかかわり頻度も増えたことが確認された。事例分析からは、ポートフォリオ絵本制作を通して、親が、対象児の抱いている自分自身や同胞、そして家族に対するありのままの気持ちを理解し、対象児に受容的なコメントを返す過程で、親子のコミュニケーションが促進されていく様子が確認された。しかしながら、一方でポートフォリオ絵本に表された対象児の気持ちを親が十分受け止めることができないままのケースがあることも確認された。親自身が抱えるきょうだいの養育に対する不全感を改善し、きょうだいとのコミュニケーションスキルを高めるための、親に対する直接的支援をプログラムに加える必要があると考えられた。

## 2) 家族参加型きょうだい支援プログラム「ジョイジョイクラブⅠ」

知的障害及び発達障害のある同胞をもつ16名のきょうだいを対象として、きょうだい、同胞、親がともに参加する全6セッションからなるプログラムを開発し、1セッションあたり2時間、2週に1回の頻度で実施した。このプログラムは1セッションが4部で構成される。すなわち、①参加者が思い思いにスタッフを交えて遊ぶ15分間程度の自由遊び時間、②参加した家族全員が楽しい感情を共有する体験を導くため、参加者全員が集まって行う30分間の家族ムーブメント活動、③きょうだい、同胞、親がそれぞれに分かれてニーズに応じた課題に取り組む60分間のグループ別活動（具体的には、きょうだいは同胞の障害についての勉強、同胞に関して起こる問題や自分の気持ち、家族に関する話し合いなど、同胞はサポーターとのムーブメント活動や造形活動など、親はきょうだいの気持ちやきょうだいのかかわり方に関する話し合い、大人のきょうだい当事者による講演の聴講、きょうだいの養育に生かすスキルのトレーニングなど）、④きょうだいと親だけがペアになって遊びを楽しみ、親子の直接的なかわりを促進するための15分間の親子ふれあいムーブメント活動である。

実践の結果、実践後に対象児らが同胞に関連して抱く否定的な感情に低減が見られ、特に、「余計な負担の感情」が有意に低くなった

ことが示された。また、対象児らのインタビューから、同胞の障害特性を理解し、その育ちを客観視できるようになり、適切で積極的なかわり意欲が高まったこと、さらに、親のアンケートから、対象児が同胞に対して感情的に激昂することが減り、親から見ると受容的なかわりをするようになったことが示された。一方、「FDT親子関係診断検査(以下、FDT)」における親子関係について、対象児らに関しては、当初より安定的であったものが、実践後にさらに安定化する傾向が確認された。母親に関しては、安定化した事例と不安定化した事例が確認されたが、事例検討から、いずれも対象児に対する見方を変え、自分自身の親としてのかかわり方を改善する方向で動き出しており、不安定化したケースに関しては、親の自己評価の厳格さが影響したと考えられた。実際に、対象児らのインタビューや親へのアンケートなどからは、親が、対象児らの不公平感や負担感を的確に判断し、対応できるようになったことが裏付けられた。

## 3) 家族参加型きょうだい支援プログラム「ジョイジョイクラブⅡ」

重度・重複障害のある同胞をもつ7名のきょうだいを対象として、きょうだい、同胞、親がともに参加する全7セッションからなるプログラムを開発し、1セッションあたり2時間、2週に1回の頻度で実施した。各セッションは、「ジョイジョイクラブⅠ」同様の4部構成とした。ただし、各セッションでは、重度・重複障害に関する話題を取り上げ、家族ムーブメント活動も、重度・重複障害のある同胞ができる活動を家族と一緒に楽しむ体験を積むことをねらいとしてアレンジした。さらに、ポートフォリオ絵本制作プログラムを加えた。

対象児らについては、当初から同胞に関連して抱く否定的感情の程度は低く、FDTの親子関係も安定的であり、対象児のインタビューからも、それを裏付けるエピソードが得られた。むしろ、親のほうがかきょうだいの養育に悩みを抱え、親子関係に不安定さをもっていることが示された。実践の結果、きょうだいの同胞に関連して抱く否定的感情の「同胞の障害に対する心配事」が有意に減少し、FDTにおいてもきょうだいから見た親子関係、親から見た親子関係がいずれも安定化し、全体として「ジョイジョイクラブⅠ」で得られたものと同様の効果が確認された。

しかし、事例分析から、重度・重複障害のある同胞をもつきょうだいの特徴的な課題と、その変容が明らかとなった。同胞の障害の重度さゆえに、きょうだいは同胞の世話をすることが同胞との唯一の「遊び」の機会であり、親から任された「家族役割」でもあった。しかし、プログラムが進むにつれ、中には、実はそのような家族役割を重責と感じており、本音を親に言えない自分を自覚し始めるきょうだいのケースが顕在化することとなった。

プログラムを終えた段階では、同胞に関連して抱く否定的感情をありのまま表出し、そ

れを親に受容されることによって、親子の関係がさらに受容的で安定的になったケース、親に話せないでいた同胞の障害に関する心配や疑問を親と共有できるようになったケース、同胞と一緒に家族で思い切り遊べる喜びを体験して、家庭でのかかわりが広がったケースなど、それぞれ変化の様相は異なるものの、いずれも親から求められる家族役割にこたえる親子関係ではなく、きょうだいの現状を親が受け入れ、それを尊重する親子関係へと変化していったことが確認された。また、そのような親子関係が生み出されたのは、実践によりもたらされた親自身の変容による成果でもあることが、親の報告から明らかとなった。

#### (4) 研究成果の事業化

本研究で開発したきょうだい支援プログラムは、富山大学人間発達科学部と、富山市手をつなぐ親の会（会長 服部 隆則 氏）とのタイアップにより、継続的に地域の障害のある子どものきょうだいとその家族支援プロジェクト「ジョイジョイクラブ」として、平成26年度より共同事業化された。これにより、地域に根ざした形で、本研究の成果を発展させていくことが可能となった。この事業は、富山大学人間発達科学部 志賀文哉准教授以下、約10余名の富山大学「子どもとのふれあい体験」受講学生、及び、後述する研究協力者である学校教員等が中心スタッフとなり、加えて、富山パイロットクラブ（大坪 亮子 会長：2014年まで、羽根 由 会長：2015年より）他のボランティア協力を得て組織化され、遂行されており、今後も継続予定である。

#### <引用文献>

- ① Meyer, D. J. & Vadasy, P. F., *Sibshops: Workshops for Siblings of Children with Special Needs*, Revised Edition. Baltimore, Maryland, Paul H. Brookes, 2008.
- ② 芝崎紘美、羽山順子、山上敏子、障害児きょうだいの抑うつと不安について：家事の手伝い・障害児の世話との関連、久留米大学心理学研究、5、75-80、2006.
- ③ 立山清美、立山順一、宮前珠子、障害児のきょうだいの成長過程に見られる気になる兆候：その原因と母親の「きょうだい」への配慮、広島大学保健学ジャーナル、3(1)、37-45、2003.
- ④ 吉川かおり、障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性：セルフヘルプ・グループの意義、東洋大学社会学部紀要、39(3)、105-118、2002.
- ⑤ 柳澤亜希子、障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方、特殊教育学研究、45(1)、13-23、2007.
- ⑥ 小宮山博美、宮谷恵、小出扶美子、入江晶子、鈴木恵理子、松本かよ、母親から見た在宅重症心身障害児のきょうだいに関する困りごととその対応、日本小児看護学会誌、17(2)、45-52、2008.
5. 主な発表論文等  
〔雑誌論文〕（計11件）
- ① 阿部美穂子、障害のある子どものきょうだいと保護者の関係性支援に関する実践的研究：ポートフォリオ「家族の紹介ブック」創作活動を通して、家族心理学研究、査読有、29(2)、85-98、2015.
- ② 阿部美穂子、家族参加型ムーブメント活動が障害のある子どものきょうだいにもたらす効果：親ときょうだいへのアンケート調査から、北海道教育大学釧路校研究紀要「釧路論集」、査読無、47、119-130、2015.  
<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7930>
- ③ 阿部美穂子、障害のある子どものきょうだいのための障害理解支援プログラムに関する実践的研究：ポートフォリオ絵本の制作活動を通して、発達障害研究、査読有、37(3)、233-246、2015.
- ④ 阿部美穂子、川住隆一、重度・重複障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラム開発に関する実践的研究、東北大学大学院教育学研究科研究年報、査読無、63(2)、141-166、2015.  
<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/handle/10097/60558>
- ⑤ 阿部美穂子、神名昌子、障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラムの開発に関する実践的研究、特殊教育学研究、査読有、52(5)、349-358、2015.  
DOI:10.6033/tokkyou.52.349
- ⑥ 阿部美穂子、重症心身障害のある子どものきょうだいの同胞観に関する研究：中高生のきょうだいの作文分析による、富山大学人間発達科学部紀要、査読有、9(2)、151-161、2015.  
[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=920&item\\_no=1&page\\_id=32&block\\_id=36](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=920&item_no=1&page_id=32&block_id=36)
- ⑦ 阿部美穂子、太田千裕、神名昌子、石井郁子、障害のある子どものきょうだいを育てる親の子育て観の変容：家族参加型支援セミナーの参加を通して、富山大学人間発達科学部紀要、査読有、8(1)、85-99、2013.  
[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=861&item\\_no=1&page\\_id=32&block\\_id=36](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=861&item_no=1&page_id=32&block_id=36)
- ⑧ 阿部美穂子、小林保子、イギリスにおける障害のある子どものきょうだいの支援：

支援プログラムの実際、富山大学人間発達科学部紀要、査読有、7(1)、153-162、2012。  
[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=838&item\\_no=1&page\\_id=32&block\\_id=36](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=838&item_no=1&page_id=32&block_id=36)

[学会発表] (計 13 件)

- ① Mihoko Abe, Yasuko Kobayashi, Research Concerning Relationships between Siblings' Negative Feelings and Expectation of Support from Parents, The 13th ISQOLS Annual Conference, Phoenix, AZ, USA, 2015/10/16
- ② 阿部美穂子、佐々木彩乃、谷津尚美、松本めぐみ、諏方智広、野口和人、家族支援の視点から障害のある子どものきょうだい支援を考える(4)ーライフステージに応じた支援：進路選択ー、日本特殊教育学会第 53 回大会、東北大学、2015/09/21
- ③ 阿部美穂子・太田千裕、障害のある子どものきょうだいを育てる親の子育て観の変容ー家族参加型きょうだい支援セミナー「ジョイジョイクラブ」の実践を通してー、日本特殊教育学会第 52 回大会、高知大学、2014/09/22
- ④ 阿部美穂子・清田悠代・諏方智広・太田千裕・吉川かおり、家族支援の視点から障害のある子どものきょうだい支援を考える(3)ー親支援の視点からー、日本特殊教育学会第 52 回大会、高知大学、2014/09/21
- ⑤ Mihoko ABE, Practical study on the effect of a sibling support program creating a picture portfolio about a child with disabilities and a family, 4th IASSIDD Europe Congress, University of Vienna, Austria, 2014/07/16
- ⑥ 阿部美穂子、小林保子、神名昌子、諏方智広、家族支援の視点から障害のある子どものきょうだい支援を考える(2)、日本特殊教育学会第 51 回大会、明星大学、2013/08/31
- ⑦ Mihoko ABE, Chiaki ANNEN, Practical study on the effect of a family support program for siblings of children with disabilities, Asia-Pacific IASSADD 3rd Regional Conference, Waseda University, Tokyo, Japan, 2013/08/23
- ⑧ 阿部美穂子、諏方智広、神名昌子、小林保子、柳澤亜希子、家族支援の視点から障害のある子どものきょうだい支援を考える、日本特殊教育学会第 50 回大会、つくば国際会議場、2012/09/30

[その他]

- ① 新聞報道：障害児のきょうだい支援写真入り。北日本新聞。2014/6/22
- ② 報告書：阿部美穂子、障害のある子どものきょうだいとその家族の QOL 支援プログラムの開発成果報告書、全 128 頁、2016。
- ③ 招待講演：阿部美穂子、小林保子、第 5 回日本小児診療多職種研究会ワークショップ、パシフィコ横浜、2016/7/30(決定)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

阿部 美穂子 (ABE, Mihoko)  
北海道教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：70515907

### (2) 連携研究者

小林 保子 (KOBAYASHI, Yasuko)  
鎌倉女子大学・児童学部・教授  
研究者番号：30435234

川住 隆一 (KAWASUMI, Ryuichi)  
東北大学・教育学研究科・教授  
研究者番号：20124208

### (3) 研究協力者

志賀 文哉 (SHIGA, Fumiya)  
富山大学・人間発達科学部・准教授  
研究者番号：50315537

諏方 智広 (SUWA, Tomohiro)  
横浜きょうだいの会・代表

神名 昌子 (KINNA, Masako)  
富山県立しらとり支援学校・教諭

安念 千明 (ANNEN, Chiaki)  
富山県立しらとり支援学校・教諭

太田 千裕 (OTA, Cnihiro)  
富山県立高岡支援学校・教諭

森 彩 (MORI, Hikari)  
富山市立浜黒崎保育所・保育士

藤原 佳子 (FUJIWARA, Yoshiko)  
富山県上市幼児ことばの教室・指導員

Don Meyer  
Sibling Support Project・代表

Monica McCaffrey  
Sibs UK.・代表